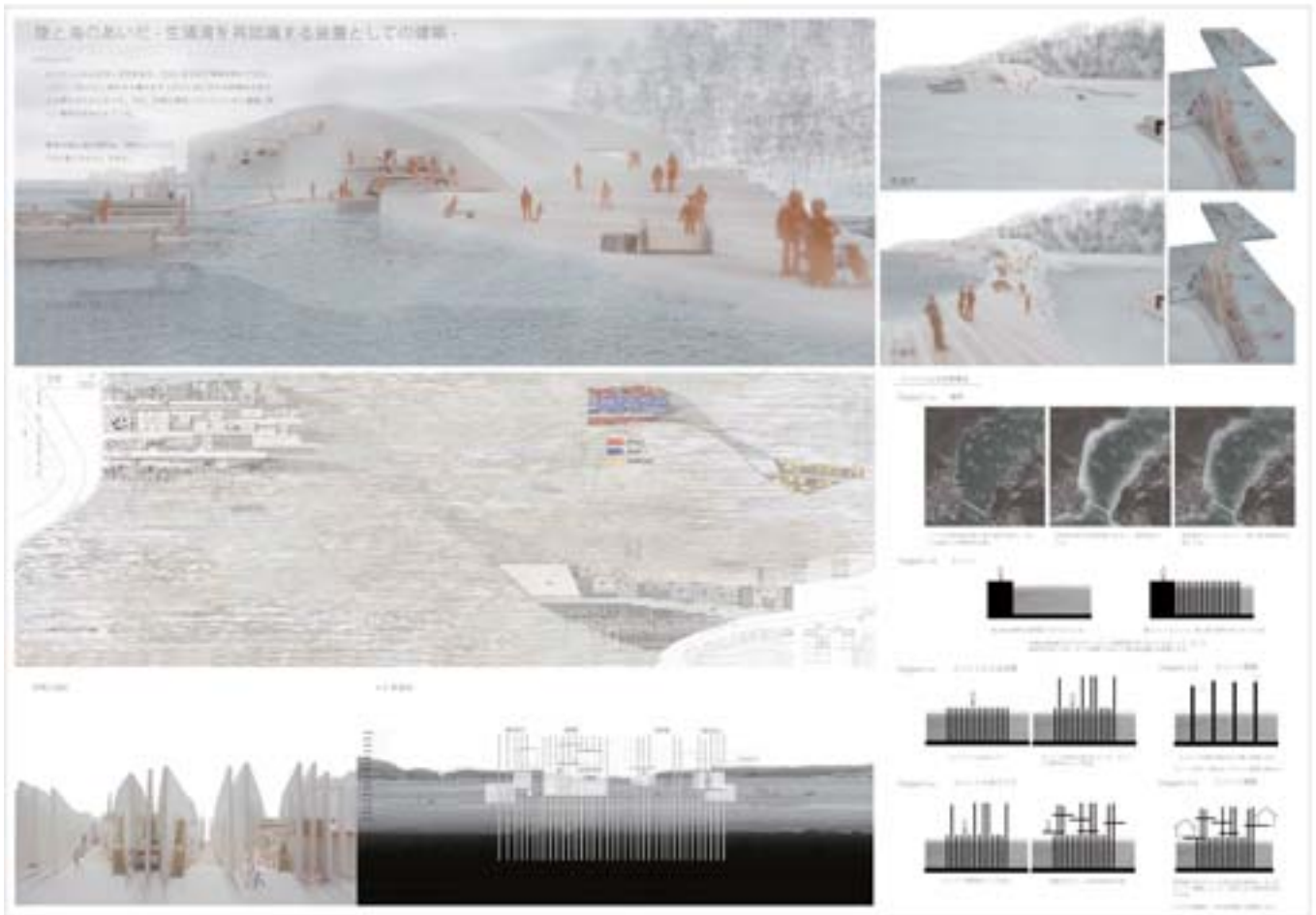




陸と海のあいだ 生浦湾を再認識する装置としての建築



林 佳史 (はやしよしふみ)
千葉工業大学 工学部 建築都市環境学科



かつて、人と水は共存し文明を支え、今日に至まで発展を続けてきた。しかし2011.3.11東日本大震災をきっかけに水に対する認識は今までとは異なるものとなった。今日、日常的に関係していた人と水と建築に新しい関係が求められている。敷地の陸と海の境界は堤防というただ「分け隔てるもの」である。こうした境界線ではなく、私は境界面の質を持つ水辺を提案する。陸と海を「分け隔てるもの」から「つなぐ」建築。そして、堤防のように守り砂浜のように憩う水辺の建築を提案する。

講評

3.11以降、津波に対する恐怖からか、やたら高い堤防を張り巡らす防災計画が多い中、作者の作品は敢えて海に開いた堤防ではなく消波堤を試行しています。現実問題、海面すれすれの高さのスリット壁で津波を防ぐのは無理でしょうが、人と海との共存を守ることは可能です。海岸線を海岸面で捉え直す試みは、多分スリット壁だけではないでしょう。しかし、作者の案が優れているのは、建築性の高さにあります。必要な壁だけを必要な高さにすることにより、平面的はもとより立面的にも自由な位置に建築物を構築できることは、並列壁の幾何学的特性を巧みに利用した、海岸面に対する秀逸な解でしょう。また、対岸への渡りを考える時、水の上に架かる橋が普通ですが、満潮時は水面下に沈む橋と言う発想は、海との共存の延長線から来るのでしょうか・・・。

模型もしっかり作り込まれており、今後の成長を期待します。

(審査委員：林美栄子)

